[サンチャ]

SANCHA

Mar.2022 vol.05

日本大学 三軒茶屋キャンパス 広報誌

スポーツ科学部

SS
COLLEGE OF SPORTS SCIENCES

[サンチャ]

SANCHA

Mar.2022 vol.05

日本大学 三軒茶屋キャンパス 広報誌

危機管理学部

RM
COLLEGE OF RISK MANAGEMENT

MESSAGE from DEAN of RM

卒業生の皆様へ

第三期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中での最後の2年間でした。世界中の大学生が同じような環境下で学びました。授業ではオンラインやオンデマンドの授業、インターンシップや就職活動ではZOOMなどを利用した面接と、これまでとは全く異なった環境の中で大学生活を過ごされました。私たちも戸惑いや混乱の中でなんとか授業や指導を行ってきました。このような経験をしてこれから社会へ旅立つ皆さん。これまでの努力に敬意を表します。

「窮すればすなわち変ず、変ずればすなわち通ず」八方ふさがりのように思える状況でも、解決する方法は必ず見つかるという格言で、危機管理によくあてはまると思います。

特に困難だったこの2年間の経験をもとに、社会へ羽ばたいていく皆さんの前途に幸多かれと祈ります。そして、元気な姿をホームカミングディで見せてください。

危機管理学部長　教授　福田　弥夫

特集

Withコロナでの学び方

“コロナ”に翻弄され続けた1年を経て、
ようやく取り戻しつつあるキャンパスの日常風景。
まだまだ気を緩めることはできないものの、
様々な対策を講じた新たなスタンダードとしての学びやつながりが実践されています。

感染対策を講じながらの対面授業再開

新型コロナウイルス感染予防を充分に講じながら、三軒茶屋キャンパスでの学びやキャンパスライフをどのように取り戻していくか―Withコロナ2年目となった令和3年度は少人数演習科目を中心とした対面授業と、講義科目を中心としたオンライン授業をバランスよく配置することで、教室・施設が密になるリスクを避けながらキャンパスライフを再開しました。

対面授業ではパーティションやフェイスガードを用いた飛沫感染防止、座席やマイクのアルコール消毒の徹底に加え、全学生の着席位置を毎回記録することで、安全・安心な学び環境を維持しています。キャンパス内を歩いていると、教室で学生がプレゼンを行う様子や、ラウンジで談笑したりPCコーナーでレポート作成に勤しむ学生の姿があり、キャンパスでの学びが徐々に息を吹き返したことを実感します。

学部1年生からは「対面授業で他の学生や先生とも交流でき、講義は質の高いオンライン授業で効率よく学べるので、今期の授業スタイルはとても自分に向いていた」という感想も寄せられました。また基礎疾患等を有するなど通学に不安のある学生は、所定の届け出をすることですべてオンライン授業に切替えて受講することもでき、誰もが不安なく学びを継続できるよう引き続き取り組んでいきます。

密を避けながらのキャンパスライフ

充実したキャンパスライフには、質の高い授業に加え、友人との交流も大切になります。三軒茶屋キャンパスでは、密になるリスクを避けながら、食事や授業の準備、時には学生同士がリラックスして過ごせるスペースが設けられています。昼食は、1階食堂のほかに、指定教室で取ることができます。日替わりで来るフードトラックを利用することも楽しみの1つです。

授業の合間は、学生ラウンジや6階窓側スペースを利用できます。6階窓側は、世田谷の街並みの向こうに東京タワーやスカイツリーが見渡せる気持ちの良い環境で、1人用のテーブルや椅子が設置されています。

❶毎回決められた席に学生が座り行われる対面授業 ❷飛沫対策として講師席にアクリルのパーティションを設置 ❸状況に応じて対面授業にオンラインでの参加も可能 ❹学生食堂のテーブルにもパーティションを設置し、ソーシャルディスタンスと黙食を促す ❺フードトラックの駐車場にも行列の間隔を保つようにマーキング ❻テーブルと椅子の数を減らしてソーシャルディスタンスを確保した学生ラウンジでは、自習などに努める学生の姿も増えてきた ❼眺望が良く明るい6階窓側スペースは学生たちの憩いの場所として人気

教員の眼

国家、社会、個人の間に存在する刑法

市民の安全を図り、被害者そして加害者のために刑法の最適化について考え、探っていきましょう。

危機管理学部 教授 上野 幸彦

インタビュアー
危機管理学部4年 丸茂 芙樹

丸茂：先生は長年法学を研究してこられたわけですが、危機管理学を学ぶ学生に考えて欲しいことは何でしょうか？

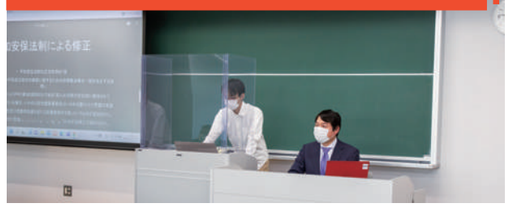
上野：危機管理学部の教育プロセスは法学をベースにした危機管理学を特徴としています。リスクに取り組み、そのコントロールを図ったり、マネジメントを検討するとき、社会を構成する人に、より安全な社会を構築するため、さまざまなことが求められます。その際、主体である構成員相互間の社会関係について把握することが必要です。このためには、法主体間の権利義務関係の分析が不可欠なのです。この点をしっかりと意識して、難しいとは思うのですが、法律にも関心をもってもらい、法律関係の基礎的理解を養って頂きたいと期待しています。

〈教員プロフィール〉
1987年日大大学院博士後期課程退学。日大法学部助手、講師を経て、2016年危機管理学部准教授、2021年より現職。

丸茂：先生は、刑法が専門で、犯罪と刑罰のことを取り扱ってこられましたが、危機管理と刑法について、どのようにお考えですか。

上野：この学部で教え始めて、わたし自身ずっと考えているわけですが、率直に言って、この質問にどう答えるべきか、大いに悩みます。肝心な質問に的確に返答できず、頼りない先生で申し訳ありません（笑）。ただ、刑罰で何でも解決できるというわけではないとは思っています。刑罰は強制的で非常に重大なサンクションですので、上手にそして慎重に利用することが大切でしょう。この観点から、刑罰以外のフォーマル、インフォーマルな手段も含めて刑罰の利用を検討する必要があります。それと、もう一つ留意しなければならないのは、被害者に対する救済·支援やケアと刑罰を科した後の加害者への対応についてです。これらとセットで、刑法や刑罰を考えることが、今後ますます重要になってくるのではないでしょうか。

危機管理学部 ゼミナール紹介



特殊研究
吉田正法 研究室

担当教員 教授 吉田 正法

国際安全保障のリアリティを学ぶ

当研究室では国際安全保障や防衛問題について、実務の観点を踏まえたリアリティを追求した研究を行っています。そのため、国際的な視点のみではなく、国内政治過程、法学の知識を踏まえた政策分析といった複合的な視点を持つことを目指しています。また三茶祭では、「新型コロナウイルス感染症対応における軍事的知見の活用」をテーマに発表を行いました。

〈教員プロフィール〉
専門／軍事法・戦争学
■防衛省内部部局等で防衛行政等に従事
■2020年本学教授に就任

“危機管理”を見て聞いて知って!

オープンキャンパスをWEBと対面で同時開催!

昨年度はオンライン型のみでしたが、今年度は7月のオープンキャンパスをオンライン型とキャンパス来場型の併用で開催しました。来場型では新型コロナ感染防止のため、はじめて「グループツアー方式」を採用。来場順にグループをつくり、スタッフの引率のもと学部説明、模擬授業、施設見学、進学相談に順番に参加していただくことで、フロアごとの来場者数や間隔を管理しながら、安心して学部の学びに触れていただきました。模擬授業も例年より実施回数が多く、複数の授業を「はしご」する来場者の姿も。皆さん熱心に聴き入っていました。

危機管理学部オープンキャンパス2021模擬授業

東日本大震災から10年	木下誠也 教授
コロナ危機における防災・減災	山下博之 准教授
コロナ対策と警察	金山泰介 教授
コロナ禍における日本の観光危機管理の動向と展望	田昌禾 准教授
新型コロナ禍とグローバル時代	先﨑彰容 教授
新型コロナウイルスに対する危機管理とリスクコミュニケーション	福田充 教授

卒業生 NOW!

社会の様々な領域で活躍している危機管理学部の卒業生たちをご紹介します。

2020年卒業・1期生
長岐 裕介
NAGAKI Yusuke
東京消防庁 勤務

都民のためにできることのすべてを

現在の消防署に勤務して1年が過ぎました。現在はポンプ隊員として、火災や救助など、多種多様な災害に出場しています。同じ災害は1つとしてないので、経験豊富な隊長や先輩方から様々なことを教わりながら訓練する日々です。

今後は、ポンプ車の運行と放水のためのポンプ運用をする機関員を目指し、資格取得に向けて関係法令などの勉学と操縦訓練に励んでいます。

2021年卒業・2期生
須藤 海
SUDO Kai
国税庁 勤務

頼られる税務職員を目指して

私は東京国税局の採用で、現在は都内の税務署に勤務しています。税務職員は、幅広い知識が求められ日々の自己研鑽が必要となります。また、実際に納税者の窓口として、国民の立場を肌に感じながら使命感を持って職務に取り組める環境は、私を成長させてくれています。

今後も税務関係の幅広い仕事をして経験を重ね、国民からも組織からも頼られる税務職員になるということを目標として、目の前の仕事に全力で取り組んでいます。

2021年卒業・2期生
山下 凜
YAMASHITA Rin
日本ヒューレット・パッカード勤務

学んだことが業務の中で活きている

私は現在システムエンジニアとして働いています。まだ本配属から半年も経っておらず、分からないことばかりですが、日々新しい知識が増えることに喜びを感じ、充実した生活を送っています。

システムエンジニアの仕事は危機管理学と通ずる点が多々あり、在学中に学んだリスクに対する思考力は、サーバルームでの作業やIT技術を理解する際など、日々の業務における様々な場面で活きていると思います。

2021年卒業・2期生
尾澤 悠菜
OZAWA Haruna
横浜市南区役所 勤務

安心安全な暮らしを支えたい

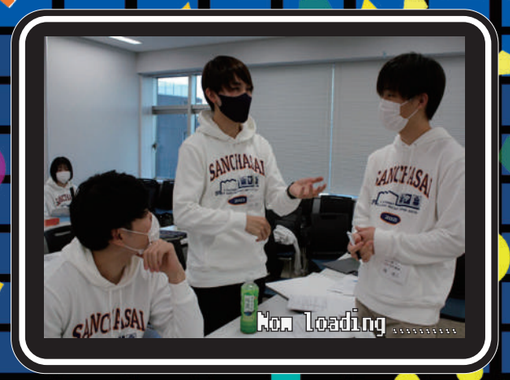
幅広い世代の人と接しながら、人々の安心安全で健康的な暮らしを支えていきたいと思い、公務員を目指してきました。現在は区役所の福祉保健課に所属し、乳幼児からお年寄りまで、様々な世代の方の暮らしと健康を支える業務に携わっています。

また、災害時に適切な医療を区民の方に提供できるよう、区医師会などと協力しながら災害時医療体制の整備を行っています。

三茶祭 2021▶レポート

▶ 広報局の二人がバッチリ記録

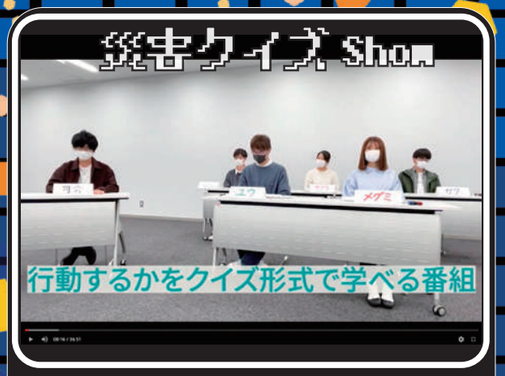
▶ 三茶祭の舞台裏
3、2、1　キュー！



▶ インスタライブを行いながら実際に校内を歩き回り、三軒茶屋キャンパスの日常を紹介しました。

▶ 三茶祭当日には、様々な企画をYouTubeで公開しました。LIVE配信企画では、視聴者の皆さんもコメント欄で盛り上がりました。

▶ 3つのお題で白熱の討論バトル！杉山先生の巧みな弁論と、松尾先生のハイクオリティなパワポが注目ポイントです！



▶ 水害に遭ってしまったハルカとサヤ。こんな時、あなたならどうする？災害について、先生方のフィードバックを交えながら学べる企画です。

▶ 三茶祭当日の本部の様子！

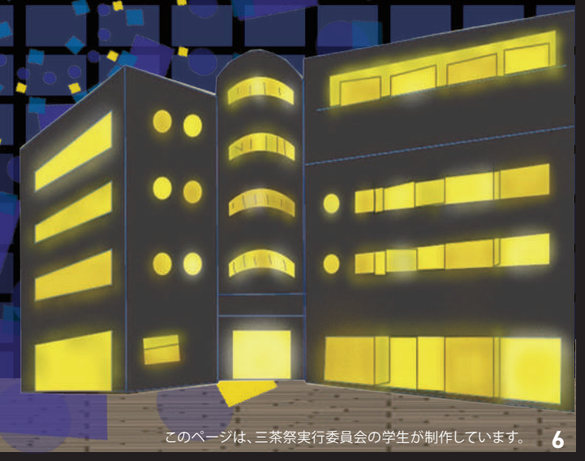
三茶祭マスコットキャラクター

▶ 危機管理学部ちゃーさん
スポーツ科学部さんちゃん

▶ 第5回は三茶祭史上初、オンライン開催！皆で試行錯誤しながら頑張りました。

▶ 三茶祭　実行委員会　委員長　川端あかり

今年のテーマは「Chat&meet（チャミット）」。オンライン上ではありますが、多くの方とお話（Chat）し、まるで会って（meet）いるような感覚になる、そんなサミットのような場を三茶から多くの方にお届けしたいと考え、様々な企画を実施しました。三茶祭を通して、危機管理学部・スポーツ科学部の魅力を知って頂けたなら幸いです。



このページは、三茶祭実行委員会の学生が制作しています。

PICK UP ATHLETE ピックアップ・アスリート 2021-2022

柔道

スポーツ科学部1年

素根 輝

- 東京2020オリンピック
  女子78kg超級 金メダル
  男女混合団体 銀メダル
- グランドスラム・タシケント
  女子78kg超級 優勝

競泳

スポーツ科学部2年

本多 灯

- 東京2020オリンピック
  男子200mバタフライ 銀メダル
- 日本選手権2021
  男子200mバタフライ 優勝
- 日本学生選手権2021
  男子200mバタフライ 優勝
  男子4×100mフリーリレー 優勝
  男子4×200mフリーリレー 優勝

競泳

スポーツ科学部4年

関 海哉

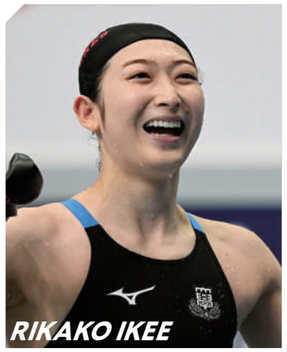
- 東京2020オリンピック
  男子4×100mフリーリレー代表
- 日本選手権2021
  男子100m自由形 3位
- 日本学生選手権2021
  男子100m自由形 優勝
  男子4×100mフリーリレー 優勝
  男子4×100mメドレーリレー 優勝

競泳

スポーツ科学部4年

長谷川 涼香

- 東京2020オリンピック
  女子200mバタフライ代表
- 日本選手権2021
  女子200mバタフライ 優勝



競泳

スポーツ科学部3年

池江 璃花子

- 東京2020オリンピック
  女子4×100mメドレーリレー 8位
  女子4×100mフリーリレー 代表
  混合4×100mメドレーリレー 代表
- 日本選手権2021
  女子50mバタフライ 優勝（学生新）
  女子100mバタフライ 優勝
  女子50m自由形 優勝（学生新）
  女子100m自由形 優勝
- 日本学生選手権2021
  女子50m自由形 優勝
  女子4×100mフリーリレー 優勝
  女子4×200mフリーリレー 優勝

競泳

スポーツ科学部3年

小堀 倭加

- 東京2020オリンピック
  女子400m自由形・800m自由形代表
- 日本選手権2021
  女子400m自由形 優勝（学生新）
- 日本学生選手権2021
  女子400m自由形 優勝（3連覇）
  女子4×100mフリーリレー 優勝
  女子4×200mフリーリレー 優勝

MESSAGE from DEAN of SS

卒業生の皆様へ

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは2020年からコロナ禍の中でさまざまな工夫を凝らしながら学修に励み、学生生活をより充実したものにするため大変な努力を重ねられてきたかと思います。コロナ禍において、これまでは当たり前に語られてきたスポーツの価値やスポーツの魅力といったものも、あらためて考え直さなければならなくなりました。本学部が養成を目指している「反省的実践家」は、課題をその現場で発見し、解決へと導く方法論を様々な観点から検討し実践することができる能力を持つ人材を指しますが、この現在の状況を打開するためにこのような人材は大いに活躍できると考えています。卒業生の皆さんは「反省的実践家」として身に付けた能力をいかんなく発揮し、ピンチをチャンスに変える発想力と、それを確実に実行していく実践力でこれからの人生を切り開いていきましょう。

スポーツ科学部長 教授 小山 裕三

スポーツ科学部 ゼミナール紹介

Sports Sciences SEMINAR

小松 ゼミナール

担当教員
教授 小松 泰喜

専門領域
リハビリテーション医学

「RETURN TO PLAY、アスリートの競技復帰に最善を尽くす」

予防に勝る治療はないと言われるように、目標はケガや故障を無くすこと！

アスレティックリハビリテーション領域をその学問的基盤とし、ケガや故障のメカニズムを知り、そのための予防の方法や競技復帰のための最適な道筋を探求することをゼミナールの特徴にしています。

そもそも姿勢や動作は身体の仕組みとしてどのように成り立っているのか、基本的な運動の成り立ちを知ることが、競技力向上への近道であるという考えに立脚しています。このことを探求するために、ゼミナールでは三次元動作解析装置など最先端の研究機材を使用しています。

一方でアスリートの日常に着目し、練習や競技時間以外の時間の過ごし方が競技に影響を与えているかなど、研究課題は幅広く扱うこととしています。そのため、振る舞いや所作なども考えながら、競技力向上だけでなく広く健康問題も扱うようにしています。

スポーツ科学部授業紹介

スポーツ運動学原論

スポーツ科学部 助教 宮内 育大

現象学的立場から人間の運動の構造と発生を理解し、スポーツ活動に重要な運動質や運動観察、運動学習、運動の発達、運動の指導方法などについて、運動研究の発展の歴史を踏まえながら理解を深めることを目的とした、講義形式の授業となります。

競技スポーツ習得実習

スポーツ科学部 専任講師 加藤 幸真

競技スポーツ習得実習では日々のトレーニング実践を振り返り、自身の動きに関するコツやカン、イメージを取り上げます。グループディスカッションを繰り返し行い、自身の動きを言語化、文章化することと、グループメンバーのコツ・カンを共有することでトレーニングの質的分析を行います。コロナ禍においてはオンライン形式でのディスカッションを実施しました。

「人間力を磨き、パリ五輪では金メダルを。」

競泳・200mバタフライ 銀メダリスト

本多 灯 選手

（スポーツ科学部・2年）

インタビュアー：
スポーツ科学部 専任講師 澤野大地

昨夏の東京2020オリンピック競技大会の競泳・男子200mバタフライにおいて、スポーツ科学部2年の本多灯選手が銀メダルを獲得し、日本中を沸かせたのはまだ記憶に新しい。この五輪をどんな気持ちで戦っていたのか、そして現在と将来をどう考えているのか。オンラインでのインタビューではあったが、1人のアスリートとして、人間として、さらなる成長を目指す本多選手の、熱く真摯な思いと確かな決意を感じとることができた。

COLLEGE OF SPORTS SCIENCES

「夢の舞台」で戦えたことが何よりうれしい。

—本多灯選手、銀メダル獲得、おめでとうございます。

ありがとうございます。

—銀メダルを獲った時の率直な気持ちを教えてください。

ずっと自分が目指してきたことだったので、言葉ではうまく説明できないのですが、その時は本当にうれしいの一言でした。

—「メダルを獲れる」というのを意識したのはどのタイミングでしたか？

日本の200mバタフライはレベルが高いので、まず出場権を獲得できれば決勝レースには行けるだろうって思っていましたが、メダルが獲れるんじゃないかって確信したのは、本当に最後の50mぐらいの時に「あ、行けるんじゃないかな」って。レース前は、ただひたすら自分の泳ぎをできるように頑張るぞっていうくらいの気持ちでした。

—ラスト50mまで分からなかった？

はい。僕はいい泳ぎができていると思っていましたが、メダルに届くかどうかは分からなくて…。でも最後のターンをしてから「もっといけるぞ」って感じたので、これは獲れるんじゃないかなって、最後の50mで思いました。

—いやー、すごいですね。ではなぜメダルを獲れたと考えていますか？

2020年にコロナが流行った時に、出場するチャンスだと思って練習をしていたのですが、やっぱり気持ちがほかの人より五輪に向いていたのかなって思います。メダルを獲りたいという思いも強かったですし、その場所で大きく飛躍したいと思っていました。それも、周りの人たちのサポートがあったからこそですし、多くの方の力を借りて、運も身に付けられたからだと思っています。

—本多選手にとって「五輪」とはどのようなものでしたか？

僕にとって東京五輪は、「夢の舞台」でした。小学校1・2年生ぐらいの時にテレビで見た2008年のアテネ五輪、そこで北島康介選手が金メダルを獲得した時の光景が頭の中に大きく残っていて、その頃から水泳をやっていた僕は「この舞台に立ちたい」ってすごく強く思ったんです。今回その夢の舞台に立って戦えたというのは大きなことでしたが、夢だけに終わらせず、自分のできることを精一杯やれたということが、今後の生活にも試合にも大きく影響してくると思うので、本当にすごい経験だったなと心から思っています。

—やっぱり五輪は夢の舞台ですよね。

その舞台に立てるだけでうれしくて満足だったんですが、多くの選手から「出場するだけじゃなく、メダルを獲らないと盛り上がらないよ」と言われたので、本気でメダルを獲りたいと思っていました。いろんな意味で濃い時間を経験した、人生で最高の1週間でしたね。

—私自身も五輪に3回出ましたが、その舞台は何回出てもまた出たいって思えるところだし、そこで表彰台に昇るというのは、どれほど素晴らしい感動を体験したんだろうって、羨ましく思います。

最高の景色でした。2番目のところからでしたが（笑）。

ライバルの存在がモチベーションになり、成長につながる。

—水泳を始めてから20年近く、ここまで続けてこれた理由は何でしょう？

単に水泳が好きだったからですね。今も好きです。今まで練習に行きたくないとか、試合で泳ぎたくないなんていう時はありましたが、水泳に対して嫌気が差したことはありません。僕が唯一ストレス解消できるのが水泳でしたし、活躍できるところも水泳なので、続けてこれたんじゃないかと思っています。

—水泳を通じて学んだことは？

「ライバルがいることの良さ」ですかね。高校の時はふだんは内気な方でしたが、水泳に対してだけは自分をガンガン出していけて、ちょっと目立ちたいなっていう気持ちがありました。その中で、ライバルと競り合ったり、ライバルに負けたくないという気持ちが湧いてきますし、練習中に気が重くなって「ちょっとサボっちゃおうかな」と思った時でも、「あの人はどんな練習をしてくるんだろう」と考えると、さらに頑張れました。競い合うライバルの存在が、自分のモチベーションを上げてくれるし、成長させてくれる要素の1つだと思います。

—本多選手が感じる水泳の一番の魅力はどんなところでしょうか？

極論で言うと生きる上で“速く泳ぐ”ことはあまり必要ないと思うんです。でも、陸上競技などに比べ、最後のどんでん返しが一番大きくある競技かなと思います。今回の五輪でのレースもそうですが、最後の50mで一気に前に出たり、逆にトップだった選手が一気に落ちてしまったりと、何が起こるか分からないというのが競泳の魅力だと思います。

五輪後のインカレ（10月）でも200mバタフライを制し、大会2連覇を達成。さらに400m個人メドレーで2位、男子4×100mと4×200mのフリーリレー2種目で勝利するなど、男子2年ぶりの総合優勝に大きく貢献した。

—確かに200mくらいの距離になると最後に失速する選手もいますね？

最後の50mは本当に苦しい中で必死に泳ぐんですけれど、みんな同じ状況の中で誰が一番根性を持って泳げるかっていうことなんです。どの競技もそういうものだと思いますが、僕の場合は特に息つぎをしないといけないですし、常に吸えるわけでもないので、そこでどれだけ自分の根性を見せられるか。最後の50mで何があるかわからないから、そこが面白さかなって思います。

—なるほど。ちなみに本多選手自身は根性あるなって思っていますか？

根性は多少なりともあると思いますが、どちらかと言うと僕はずる賢いのかなって。序盤はあまり頑張らないで隣についていって、最後の50mだけ頑張るみたいな。練習の時からやっていて、ちょっと卑怯かなと思うこともありますが（笑）、それが僕のレーススタイルなので、続けてやっていきたいと思います。

チームを笑顔にできるのなら、パフォーマンスは続けて行きたい。

—東京五輪では本多選手の明るい性格というのが話題になり、代表チームの中でもムードメーカーだったと聞いていますが、そこは意識してやっているのですか？

意識してやっている時もあったんですが、僕は性格的に適当なところが多くて、お猿さんみたいなことを控え場所とかでもしちゃうので…それは子どものころからですが、今でも素でやっちゃう時もあります。何でこんなアホみたいなことをしているんだって、自分でも後々見返して思いますが、それでチームにちょっとでも笑顔が増えるんだったら、その方が明るくて楽しいのかなと思ってやめずに、ちょっとチャランポランな感じでやっています。

—でも、他の競泳の選手達が、本多選手のおかげでいい雰囲気ができて良かったと言っているのを聞くと、本多選手のような明るい選手がいて、チームにいい流れを持ってきてくれるっていうのは、すごくありがたいなって。その性格を是非今後も、チームジャパンのために発揮していってほしいなと思います。

はい。変わらずチャランポランに生きていきたいと思います（笑）。

—スポーツ科学部の学生として、今どのような学生生活を送っていますか？

コロナ禍で大学にも行きづらいので、オンライン授業が中心です。本当は僕も、スポーツ科学部で学んでいる他の競技の選手たちと話をして、例えば陸上競技や野球の選手はどんな練習をしているのかなどを知りたいんですが、今の状況では友達を作ることも難しいので…。でも、授業を通していろんな情報を手に入れられたなと思っています。大学生らしいことはできていないので、ちょっとイレギュラーな大学生活を送っているなという感じです。

—これまで受講してきた中で、面白いと思った授業はありますか？

対面で学べた競技スポーツ方法実習ですね。例えば「ピルエット」とかを自分で調べて、実際に選手側になってやってみたり、反対に指導者側になってコーチングしたりしました。やったことのない技を人に教えたり、教えられたりっていうのがとても楽しかったですね。

—私もその授業を担当しているのでそう言ってもらえるとうれしいですね。では、本多選手が考える「スポーツの価値」とは何ですか？

僕は、人を感動させることができるという点がスポーツの素晴らしいところだと思っています。コロナ禍で世界全体が落ち込み、日常が楽しくなくなっている状況を変えていける、その力がスポーツにはあると思います。スポーツの面白さっていうのは、何があるか分からないところや、選手それぞれにあるストーリーを感じられるところだと思うので、そういうものがコロナ禍を吹っ飛ばすパワーになってほしい。スポーツは自分自身をも変えられる素晴らしいものなので、「スポーツの価値」というのを、今後もっと高めていかなければならないのかなと感じています。

—五輪でメダルを獲った本多選手のような人が「スポーツの価値」をしっかりと社会や子どもたちに伝えていくと同時に、「スポーツの価値を大事にしたい、向上させたい」と考える選手が1人でも多く増えれば、よりスポーツの価値は高まっていくでしょうし、文化として成り立っていくのかなと思いますね。

水泳の素晴らしさを日本にも、世界にも伝えたい。

—将来、競技を終えた先の人生を想像したり、何か目指していこうなどと考えていますか？

深くは考えていませんが、競技を引退したら今までできなかったことをもう一度やってみたいと思っています。勉強はあまり好きではありませんが、学ぶことは嫌いじゃないので、例えば水泳からちょっと離れて、海外へ留学していろんなことを学んでみたい。そして日本に帰ってきた時に、水泳も含めたスポーツの素晴らしさを伝えていく何かをしたいと考えています。北島康介さんはそうやって自分のチームを作り、水泳を広めたりされていますが、僕もそのようなことをしたいなって…。僕の夢は、1つは五輪での金メダル獲得ですが、もう1つ、日本の水泳をメジャースポーツにしたいと思っているんです。高校時代、僕がどんなに結果を出しても、やっぱり野球やサッカーの県大会優勝の方が盛り上がっていて、そこはちょっと腑に落ちない思いがあったので、自分が一生懸命やってきたからこそわかる水泳の素晴らしさを、日本はもちろん、世界にも伝えていきたいと思っています。

—どんどん世の中にアピールすることで、1人でも多くの子供たちが「水泳をやりたい」って思ってくれるといいですね。最後に、今後の目標を教えてください。

もう2年後にパリ五輪がありますし、今度は金メダルを獲ることが大きな目標です。直近で3月に国際大会の代表選考会があるので、まずはそこで自己ベストを出して、「やっぱり日本の200mバタフライは本多灯だ」って言われるような泳ぎをして代表権をつかみ、本大会でも自分のレースをして優勝できるようにひたむきに練習していきたいです。コロナ禍の状況がどうなろうと、自分がやることは変わらないと思うので、自分の情熱をさらに熱くして、去年よりさらに活躍する1年になるよう頑張っていきたいと思います。

—その目標を達成するために必要なことは何だと考えていますか？

僕が競技をする理由の1つは、やっぱり人間力向上という面があると思っています。自分自身でまだまだ足りないところがありますし、練習だけでなく、生活面においても、人間性の部分においても、すべてが競技につながると考えて日々行動しています。例えばポイ捨てを見つけたらそのゴミを拾うとか、そういうところから自分を磨いていくというのが競技力向上にもつながると思うんです。実は中学生の頃に、大谷翔平選手がやっているのを見て、影響を受けて始めたことなんですが、僕がやることで、今度は誰かが僕を見て始めてくれたらいいなと思いますね。さらに、勉強も自分を磨く大きな要素だと思うので、大学を卒業してもその学ぶという姿勢を忘れずにやっていきたいと思っています。

—JOCが掲げる「人間力なくして競技力向上なし」というテーマをまさに体現していて、そこからパフォーマンス向上を目指すという姿勢が素晴らしいなって思います。是非その気持ちを忘れずに、競技を続けていただきたいと思います。ありがとうございました。

［ほんだ・ともる］スポーツ科学部2年、神奈川県出身。日大藤沢高校卒。2019年世界ジュニア選手権200mバタフライで銀メダルを獲得し注目される。本学入学後、は2020年10月のインカレで200mバタフライと400m個人メドレーの2冠。12月の日本選手権は200mバタフライ優勝、400m個人メドレー準優勝。2021年4月の日本選手権で200mバタフライを制して東京五輪出場を決め、同種目で見事に銀メダルを獲得し、世界にその名を轟かせた。